

これらの資料は預かりますと言ひ早馬口のサイドバックに詰め込んだ、路肩でのりが手を差し伸べるハイタッチ、マキもサイドから上体を挙げ加減でハイタッチ、バス通りに出たマキが言いよった。

「一平、黒目が異常だったよ何か掴んだけん」

「ついやー別にー」

等々一平はあやふにやな返事。

「自分に隠し事しちゃーどうなるか分かってんだろうなー」

「マキ、女性だろう何だその言葉遣いは」

「一平と付き合い始めてからこうなっちゃったんだ、自分に内緒ごとしたら柔術道北野流が炸裂するけん」

「おおー怖ー、さっき言ったら一平の時間になったと、明日幼稚園終わったらルパン三世鳴らせ、そーしたら話てもいいー」

着いたよとマキに言い門前で下す。

翌朝、まりより先にいっぷくに行きエアコンを入れ入口に準備中の看板を掲げた、そして何時もの窓際に陣取り今迄の経緯をPCに打ち込み始める。打ち込む手が停まった、翔平さんと白家秀忠は同じ大使館員しかも国王来日時の世話役で繋がる。ならば相谷茂樹とは如何様な関わりが、預かって来た資料に手掛かりでもと一平は天井の一点を見つめた。

いっぷくはオープンしたが客は一向に、警察関係者が多いこの店、近隣で事件があると決まって客が少ない。と言ひながらまりは一平の向かいに腰を下ろした。

「おおーい座わってる暇あんのかよ」

「ご覧のあり様よ、早いとこ事件解決してくれんかな、それにしてもさつきからPC何を打ち込み何を考え込んでんの」「高輪署の刑事さん等の協力とのりの説明で三人は繋がった、相谷監察官がいかに関わるっていか小生には関かん、

まりならどー」

まりも珍しく考え込むかの如くガラス戸越しの冬景色をながめた。静寂を切り裂くカルパン三世がいつぶくに鳴り響く、垣さんからだ。

「一平です、先日は清掃お疲れさまでした」

「一平さんお礼などどうでも良い、俺もチームいつぶくの一員だ。それより先日キスゲ橋下で拾った二点、鑑識結果がでたよ。両方ともラベル印字の擦れ具合から半年から一年以内の物と判明、電池は主にドローンに使用されている、瓶の方は香水でレディガガ・フェイムであのレディガガがプロデュースしたやつだった」

「てーことは昨年あの日あの晩、ドローンと香水を持った女いや男かもがキスゲ橋にいたとこじつけても可笑しくはないな」

「その通りその二点はさほど離れてはいなかった、それから転落事故死の件は本庁扱いとなり俺も忘れかけていたが致命傷となった転落時の打撲痕、それが二か所付いていたんだ、あそこから落ちたならば一ヶ所しか付かないか、俺は臍に落ちんのよ」

「本庁では何と言っていたんだ」

「すぐさまあの監察官が出て来、本件は所轄には関係ないと言い張るだけ、どう思う」

「何で勝手に本庁扱いしたか、垣さんも所轄も悔しさ頻りなのは、打撲痕が二か所とは小生も気になる、拾得物二点も」

「一平さんがいれば心強い」

昨日までの話をし垣さんも無理しないようにと言い電話を切った。

「まり、レディガガ・フェイムとか言う香水って知ってる」

「知っていますともレディガガブランドです、甘さ濃厚で夜につける香水とか言われています、お望みならば今宵は間に

合いませぬが明日の晩にもつけてみましょうか」

一平は眼をバクチリさせキーボードを叩き始めた、そんな仕草にまりはクスツとす。
帳が降りきった頃マキから電話が入った。

「幼稚園終わったのかい」

「年長さんのお別れ作品作りが始まったの、園児の想像力を引き出す為に廃材を使った、例えば牛乳パックとかペットボトル、納豆や豆腐の入れ物を使い自由に組み合わせ想いうかべた作品、男の子は未来の自動車とか女の子は好みの食べ物とか奇抜な作品を作り上げる、個々想像力を発揮しユニークな作品が出来上がる、一平も参考になると思うよ二月に発表がある見に来て、今、他保育士さん等と夕食摂っているところ」

「もー晩飯時が出来上がったら見に行くを頑張ってるな」

「電話したのはそうじゃないの、昨日黒目が異常に動いたでしょうその訳聞かせて」

「おーそーだったな、のりの話を聞いていて翔平さんの転落死は補佐官白家秀忠と監察官の相谷茂樹が関わっていると確信した」

「でどうするの」

「監察官室でも詳細は不明だが異様ともしられる電話の受け答え、ここん所多いと高輪署の大さんから連絡が入っている、監察官相谷茂樹に揺さぶりにかけてみる」

「相手はキャリアの監察官、一平は偽ルポライター敵わないでしょ、どうやってやるの」

「定かではないが相谷にも情報屋がいる筈、いや今はいた筈が適してんかな、そいつを見つけ出し偽情報を流すんや、昨年五月のキスゲ橋での転落事故は仕組まれた他殺が濃厚、文屋が嗅ぎ付け調べ始めたよ」

「それって危険極まりないんでは、キスゲ橋の件が殺人であれば一平にも」

「黒目が異常の件が聞きたいと言うたから言っただけ」

「それにしたって現役時と違う、丸腰じゃー何されるか分かんないよ」

「マキに手伝ってもらおうとは思わん、小生一人でやる」

「一平」

「まだ何か用か」

「自分を誰だと思つてけん、一平分つてんやろ、瀬戸内は村上水軍の末裔の端くれ、引つ込んでろつて言われたかて引つ込みゃーせんがのう、リスクが怖くては何も出来んけん、自分は何せやいいけんのう」

「マキ又その言い方、女だろうその言葉遣い何処で覚えたんや、そのけんけん言葉は何だ」

「みんな一平が教えた、文句あんか、けんけん言葉は村上水軍は基より近隣諸国は日常使っている。リスク多きは分かる、自分かてチームいづくの重臣や自分抜きで捜査始めるなんぞ」

「末裔さん相分つた、幼稚園の保育士である事を忘れずにな、頼むぞ」

マキは一平を説き伏せた達成感も手伝い、はいと園児の様な明るく元気な返事を返した。

春一番が吹いた、朝夕は冷えるも春めいて来た、そんな金曜日の夜一平はマキを伴い吉祥寺の繁華街をブラブラ、夜は冷えるもマキは数ヶ所擦れたり横破れしたジーンズに男物のシャツにカーデガン、長さん長さんではないかと右後方から声がし男が近づいてくる、

「俺だよ長さん俺だよ」

その声に一平は怪訝そうな表情をした、想い出したか誠一ではないかと返した。三鷹署時代わいせつ行為でしょつぴいた男だ。

「長さん、その節はお世話になりました、今は改心しパチンコ店で働いています、あの時、長さんに捕まり寛大なる処分が無かったら今の俺はいない、一杯やろうよ俺が持つから、少し前いや大分前になるかな、いせやが新装オープンした、行こう」

「よっしゃー行こう、小生等の飲み代はあるよ。それと長さんはやめてくれ今は警察手帳もない、健康兼ねて野に山、河川等へ鳥撮りに行っているただのリタイア組、長さんは勘弁してくれ」

三人はいせやの暖簾をくぐった、ラッシャイ座敷が空いてますぜと若衆の声。

「長さん熱燭でいいかな、そっちのお嬢さんは」

「二人熱燭でいいよ、けどな、直ぐに直せんかも知れんが小生は長さんじゃーないよ、一平でいい」

「そんなら一平さんでいかしてもらいますがな、そんでそちらのお嬢さんはお子さんお孫さん」

「小生には一姫二太郎がいたが二人とも独立した」

「そんじゃー、今流行りの年の差婚てーやつですかい」

「おいおい、小生にはまりがいているのは知っている筈」

「あいや失礼、バイクに乗らせたならピカイチ、女性白バイ隊員がお出でだった、じゃーこちらは」

「柔術道北野流の使い手、村上眞希や」

「一平さんもその使い手だったよな、出会いを聞かせて下さい」

一平はマキが中学生の頃からの経緯を話した。

「そんじゃー並みいる男どもをバツバツとお手のもんやな」

「試してみるかい、僅かながら膨らみよるところを触って見な、しよつぴかれるどころか触れた腕を逆手に締め上げられ警察ではなく病院へ行く羽目になる」

マキはにつこりするも僅かながらとはと言いたげに一平を横目で見た。

「今の小生にはしよつぴく権限はない、やってみたら」

「よしとこ、一平さんとマキさんとの関係は分かった、が何故に繁華街を仲睦まじく歩く事が出来るんだい、羨ましくてならんとよ」

おまちーと熱爛とやきとりが大皿でテーブルに、大きなおちよこに懐かしき多分な表情で誠一が注ぎかんばいー、マキがさっきの質問に答え始めた。

「奥様のまりさんも了解済み、何処へ行くのも一緒、無論自分の爺っ様も父っ様も同様に了解済み、宿泊野鳥撮影会だつて付いて行く、先日も奄美大島三泊四日で行ってきたばかり、同室だよ考えられる、下着だつて部屋の隅に置いとくし、いささか湯上りにすっぽんぽんはないけど、爺娘の関係つてとこかな」

俯き加減でマキの話を一平は聞いている。

「マキさん、一平さんたて男や、危うき事一遍たりとてなかったん」

「山間の危険箇所等では手を引いてくれたり尻を押してくれはするがそれ以外は、一平は夜が明けると散策が常、昨年戸隠へ行った時、自分は冒険を試みた。夜が明ける頃わざと布団を剥ぎ浴衣の胸や裾を開き、あられもない格好でその時を待った、カーテン越しに外が白んで来た、ごそごそ音が、一平が撮影機材の準備を始めた、誠一さんその後どうなったと想う」

「一平さんかて男や、ごく自然に」

「ブブーや、胸元を直し裾を合わせ布団を掛けた、ほつぺを掌でトントンと二回し行ってくるよと襖を閉じた。一平とはそんな付き合い、誠一さんだったらどうだったか」

「俺なら飛びついてしまうかも」

二人ともいいかなと一平が話しに割り込んで来た。

「誠一、府中署にいた相谷茂樹知っているよな、今は本庁の監察官になっている」

「忘れもしない嫌な奴だった、管轄外なのにやって来て、訳も分からずに胸倉を掴んで知ってるだろう吐けとくるんだ、こつとら吐けたつて何の事やら職権乱用も甚だしい」

「その職権乱用者の情報屋はここにいるかな」

「今は見かけなくなっちゃった、以前はパチプロの田川健次郎と大学生の室井禎一がいた」

「いたとは今はいないのか」

「去年、本庁に栄転になった、もうお前はお払い箱だと田川が怒っていた。学生の方は卒業し引越したのか、とんと見なくなった」

「田川はここにいるのか」

「実入りがなくなった、稼がんとなく中央沿線のパチンコ店巡りしている様だ、うちにも時折来るよ、まさにプロとはあいつのこと、田川が来るとうちは赤字や」

「次回はいつ来そうかな」

「来週頭だろう、来たらどうする」

「誠一、男と見込んで頼みがある」

「水臭えで、一平さんの頼みなら何なりと」

躊躇せしなれど一平は今までの事を掻い摘んで話した。

「要は昨年五月にキスゲ橋の転落死は殺人である、と田川から週刊誌が調べ始めたと監察官に話せばいい事だな、如何にも真実の如くそれとなく」

「そーだ、相谷監察官の事だ田川からなら怪しみもしないだろう」

「面白くなってきたな、この次は」

「とりあえず出方を見るとしようか、必ず動く」

その後一平は再会でもあり話は尽きなく雑談は続いた。

徳利を持ちマキが空になっちゃったよ頼もうよ、誠一が徳利を持ち上げ若衆に、若衆はこつくりと肯く。誠一に名刺を出した、今の小生の身分はこうだ、週刊平成の偽名刺を誠一に出した。

「うつ、この名刺は一平さん、ルポライターやってんの」

「この一件調査するにも手ぶらではどーにも格好つかん、知り合いの出版社に頼んで作った、上手く出来てんだろう、今後の連絡は記してあるその番号にしてくれ」

「ようござす」

「また、リスクは無きにしも非ず、心してくれ」

「俺も以前は空手をやってた、ここにいるお嬢さんには敵わんもだが、護身と称し対一ではそんな所そこいらの奴には遣られやせん、かかってきやがれだ」

「空手は凶器だ、使い方を間違えないように」

一平の寝る時間はとうに過ぎていて、マキが目配せを始めた。

「誠一、小生はリタイアしてからと言うもの早寝早起きに徹している、今日の軍議はここまでとしよう、体は一つしかない、生もんだ小生も体は大事にしている、ご自愛を忘れんとな」

三人は立ち上がり帳場へ、庶民的なこの場、自分にも払えるよとマキはカードを出した。誠一は今日の所は御馳になるかとマキを見、ハイタッチしガード方向へ去った。

「一平、誠一とか言う男信用出来んの」

「出来る、相違ない小生が太鼓判押す」

4月に入ったとある雨の日、一平はいつぶくの窓際でキーボードを叩いていた、ルパン三世が喚いた、誠一が興奮めいた声で電話してきた。

「俺だ、一平さん俺だよ」

「そんなに怒鳴らんでも分かるよ」

「開店準備しとったら田川が来た、まだ準備中だと言ったらお前に用があるんだと言う、先日頼まれた件、忠実に

伝えたよ、でそんな時の状況を話し始めた」

「何だお前か、もうお前には用はないとつつけんどんに電話を切ろうとした、まー俺の話聞いて下さいましな、いいネタですよ、パイプたばこに火つけたかー呼吸置いて聞くとしようか」

ときたんだ。

「でどんなネタだ、どうせガセネタだろう」

「ガセかどうかは聞いてからお決め下さいと言ったそうです」

「今日のパチンコの成果をつまみに一献傾けていた、見知らぬサラリーマン風の二人が隣で飲んでいた。酔いが回って来たか声が大きくなり隣の俺には筒抜けだ、キスゲ橋の転落死は事故ではなく殺人だと垂れ込みがあった、とさつき連絡が入った。今の所詳細は分からんが社に戻ればはつきりする、今から戻ると社に連絡したら今日は遅いし慌てる事もない、ゆつくりしていいよと返って来た、明日出勤すれば明らかになるだろうとか喋っていたと伝えた」

「話が進むにつれ受話器から監察官のそわそわが伝わって来たと言っていた」

「終えた所で監察官が問い出した。」

「どうせガセネタだろうが、喋っていたのはどんな男だ」

「さつきも言った通りサラリーマン風、内容からして文屋のようだった」

「どこの文屋か分かるか」

「いやーそこまでは無理だ」

「お前は今は何をやっているんだ」

「相谷さんそれはないよな勝手にお払い箱にしといて、食っていかなきゃならんパチンコ店巡りをしている、情報屋として使ってくればそんな事しなくても」

「私にも事情がある」

大出世したから俺なんぞゴミ扱いやなと誠一は言う。

「余計な詮索はしなくて良い、会つてもう少し聞かせてくれないか、ガセと想うが事実なら、なんなら以前の様に袖の下も」

「ガセと言つてたが監察官は何故に」

「お前の知った事か、この件誰か他に話してはいないだろうな」

「相谷さん以外にはおりません、なら吉祥寺でよかろう、都合のいい日に電話してくれ私が出向く。とまーこんな具合や一平さんの言う通り動き出した、どうします」

と誠一は誇らしげに話した。

「いいか誠一よく聞いてくれ、田川にこんな風に言つていってくれと、それとなく週刊平成の記者の様だった、朝刊とか夕刊、知事さんが公私混同の記事云々とか、出来ればリアルにな頼んだぞ」

「一平さん誰に物言っているんだ、俺は一の子分いやお嬢がいるから二の子分だ任せといて」
前にも言つたが無理せんとな、と一平は言いスマホを切り器用に右手を使いプツシュ。

「早乙女は出ておりまして夕方までは戻りません」

と週刊平成の返事。

「戻りましたら谷端に電話入れて下さい」

とお願いした。

外は雨模様、夏鳥が来始まつただろうにと窓越しに外を眺めていた、まりが大盆にコーヒ―二つと厚切りサンドニ皿をテーブルに置きお昼よと一平の前の席に座った。

「この雨じゃー鳥さんも大変だよ、濡れたら乾かないだろうに雨宿りどうしているのかしら」

「自然界は良く出来たもの、食べなければ死んでしまう、雨の中でもエサ取りはする羽はぬれても油を含んでいるブル

ブルツと身震いすれば水気はなくなるんだ、だけど今日みたいな雨の日は葉陰等で休んでいることが多い」

そんなまりとのひと時、鳥撮り猛者永尾さんから電話が入った。

「雨の今日、鳥撮りですか猛者さんには敵いませんな」

「野川のシダレザクラにウグイスが来ていると聞いた、サクラでホケキョと囀っているがこの雨じゃー機材濡らしてしまうのがおち、ザックに締ったままだ。もう少し囀りを聞いたら上がるつもり、明日は上がるとお天気お嬢さんが言っていた、明日仕切り直した、一平殿も如何かなシダレザクラにウグイスを」

「ありがとうございます、明日行きますご指導宜しく」

「ご指導って何、一平殿も中々どうして、じゃー明日」

門前で春仕様のマキは待っていた、バンダナに色づきのメガネ、弁当が入っているのには大きすぎる、カラフルなリックを背負っている、鳥撮りスタイルとは程遠い花見スタイル、右手をフェンダーに当てがい、やおら側車に飛び乗った、一平は門前先の角を曲がり東八通り方面へ早馬車の手綱を取った。

マキがリックを膝に載せごそそと、ジャンと共にサイケまがいに塗装されたフルフェイスを取り出した。

「信号で停まったら見て、前から欲しかったこのメット、野萱さん手作りのステッカーも貼ったよ」

とマキが言う。

「メーカー品だ、高かったんじゃないか」

「一週間前、何の風の吹き回しか父様がバースデイプレゼント欲しいかと聞いて来たんだよ、即座にメットが欲しいと言った。昨日誕生日だったので徐に包みを出しながらハッピーバースデイときた、爺っ様も出て来て分担金取られたと言ひ奥の間に、そこにはケーキに二十五本のローソクが、さー一気に吹き消されたし」

爺っさまの稽古声が響いた。

「大事にせにゃーいかんけん」

「なんだか爺っ様と父っ様に頭押さへ付けられてるみたい、でもいいや欲しかったメット手に入った、ありがとう大事に使うけん」

そーこーしていたら武蔵野公園駐車場へ早馬^二は入った。マキが機材を取り出した、今日は自分が撮ります、三脚にレンズを取り付けカメラをセットした。スケボー広場を左に見て苗圃外周路を進む、盛りを過ぎたソメイヨシノに変わりランザンやシラユキ等が咲き誇る、そんなサクラにエナガさんが、時にはぶら下りながら枝から枝へ、カワラヒワさんも交じるマキが枝被りだの、ちつともじつとしてくれないだのペチャクチャしながらシャッターを押している。クジラ山を迂回し小金井新橋に出た、野川の上流を見た、兩岸に紅シダザクラが咲き誇る、こっから六百mの上まで百六十本が植樹されている、うつわおー初めて見るマキは歓声を上げた。平日と言うのに人人だ、まだ春休みか子供も多い、遊歩道より河川敷に降りられるようになってる、シートを広げ花見三昧に更ける人もいる。ホーホケキョと鳴く方に向かう。ホケキョは聞こえても姿は見えず、さんざ振り回される、見えてんのかどうだかシャッター押している。

「ちくしょー外れたー、葉陰だー尾っぽだけ撮れたー」

と口数が多い。

小生等に気付いた永尾さんが前方で手を振っている、ここだここだと手招きしている。

「マキちゃんいらっしやい、撮れたかや」

「尾っぽだけ、枝被り多しおまけにボケ」

「囀っている方に向かうのは良しとするが追っかけてはいけない、なぜならば撮れたとしても後姿が精一杯、どんどん遠ざかるばかり」

「じゃーどうすりゃーいいんだ」

「野鳥は一般的に同じ場所に来る、そこで三脚たてて待つんです私の隣に立てなさい、ここは兩岸も見渡せ意外とよく来る場所だ、間もなく来る頃だ一息入れて待つとしよう」

永尾さんは折りたたみ椅子に腰掛コーヒーを飲み始めた、それを見たマキは一平に預けたりユックからシートを出し河原に敷き飲み物を一口二口しサクラ見物、普段なら焼酎談議……

「マキちゃん鳥撮りの基本はなー、さっきも言った通り追っちゃー遺憾のよ待つんや、一平殿から聞いておらんかや」

「一平は来たらシャッター押せばいいーそれだけ」

「最初からあれこれ言ったってまごつくだけ、その教え一平殿らしいな」

なーマキちゃんと永尾さんは尚も言う。

「モズは百舌鳥と書くんだ、数多く他種の鳴き声を真似をするから付いた名だ。こないだも長兵衛、忠兵衛、長忠兵衛……と鳴き声が聞こえた、メジロが囀っているなどその方向に行っただ、そうしたらメジロは見当たらない、モズしかいない更に近づいた、なんとモズがメジロの鳴き声をまねていた」

「モズって永尾さんが聞き間違える程物まねが上手なんだね」

「そーモズは上手だよ。それから聞き流しと言う事を聞いた事あるだろう、メジロは今言った通り、ホトトギスは特許許可局、ホオジロは一筆仕り候とか、待っている間にそんな聞き流しを想いうかべてみて」

「そう言えばいつだったか一平も言っていた」

「マキちゃん、焼酎一杯ぐい、なつてのもあるよ」

と永尾さんが言う。

「自分好きな野鳥さんだね、名は何と言うの」

「頭部に白線が入ったセンダイムシクイです、でもマキちゃんには焼酎二杯ぐーいと聞こえるかもよ」

「永尾さん、自分は程ほどしか飲まんよ」

と言いながらマキは一平を見た、何故か表情は変わらねど黒目が異様に見える、突如永尾さんが動いた。

「さー来るぞー、やや右手の空いている細枝を主に見ているんだ、隣の木まで来た、見えたらとにかくシャッター押すん

だ、いまだ！」

あの葉が邪魔してる、枝被りだ背しか見えん等々喋りながら押し続けた、開けた所にも現れる、サクラとのツーショットも撮れたとかシャッター押しながら喋り捲る。

「どうだ撮れたろ、このロケ地は一時間のうちに数回は来る待つんや、刑事さんが何時間も張り込みするように鳥撮りの基本は待つのみ」

モニターを見ていたマキが永尾さんと声かけた、撮れたけれどボツケが多いと嘆く。

「鳥撮りは最初からと言うか撮り始めから上手くはいかない、スナップ写真のようにただシャッターを押せば撮れるもんでもない」

「一平なんかファインダーに入れ押せばいいんだ、それだけ」

「はーんそうか、だがそれ正解だよ、ファインダーに入れるだけだつて大変だよ、マキちゃんはそれが出来ている、後はと言えば機材を動かしてはいけない、そうだその格好だ、さまに成って来た、叶山先生も言ってただろう」

マキは一人前気取り。

あとはなーと永尾さんは言い続ける。

「シャッター押す時は喋っちゃーいかん、ブレを生じる原因の一つ、さっきは喋り続けていた」

はい、先生と返事、一平は相変わらぬ表情だ、マキは分かっているも永尾さんは気掛かりな表情。堪らず一平に声かけた、マキが先に答える。

「例のキスゲ橋の件、別件から辿り着こうとしている、駒は動かした、相手がどう出て来るか一兩日には相手は打つて出るだろう、その後キスゲ橋への詰めをどうするか、そんなとこよ気にせんと、眼みりゃー分かるよ黒目が左右に動き大きく見える、現役時代、捜査員皆に言われてた自分流に策を練る時はいつもこうだったと、それよりウグイスさん早く出ないかな」

「今は一市民、無理しないようにと言っといてくれ、来たぞー左手から下がって来る、まだホケキョしか聞こえんがその木に止まる、その時が撮り時、さつき言った事を忘れずに逃すなよ」

「がってんだ」

待ち遠しいのか頻りとファインダーを覗き込んでいる、格好はチョー鳥撮りさんだ。

「その時の一枚を撮らなけりやーダメだと言う人もいるが見えたらシャッター押しまくるんだ」

枝から枝にチョコチョコと見え隠れしながら狙い定めた枝に、押しまくったホーホケキョとウグイスが鳴くシャッター押す、すぐさま下手に移動し視界から消えた。

「どうや撮れたやろ、シダレザクラにウグイスを液晶見てみ」

「撮れたー、シダレザクラにウグイスがホーホケキョ」

「一平殿にだらえもんサイトへUPしてもらったら、Photo by Maki・Murakamiとでも記して、良いと思うよ。昼だ、ラーメン屋が呼んでいる、私は陣払いとする、マキちゃん等は例の爆弾ライスボール持参やろ、寒からず暑からずやウグイスは又やって来る、ゆっくりと腹ごしらいしては」

「有難うございました、又ご指導宜しく願います」

二人は河川敷で爆弾ライスボールをパクついだ、一平とマキには違和感ないがその大きさは異様だ、通りすがりの人や周りで弁当を食べ始めた人があれつとした表情で見ている、子供が三人近づいてきて、でっけいおにぎり、誰が作ったのお姉ちゃんそれとおじちゃん。

「自分が作りやんした」

「お姉ちゃん、中に何が入っているの」

「ウメボシにタラコにシヤケだよ三種類入っている」

「へー美味そうだな」

「お母さんに作ってもらったら、美味しいよ、そのかし残しちゃー反則よ」

二人は背中合わせに食後のお茶を飲んでいた。来たときばかりマキは立ち上がった、背をマキの背中に委ねていた一平は倒れ掛かると共にお茶が腰と言うか大事な部分にかかる、さほどでもない熱さだがあつちーと声を出し立ち上がりカゴパンツをぶるぶると振った、マキはあら御免と言いつグイスを撮り始める。夢中でシャッターを押しまる、そんなマキを見、誰が画像の整理すんだと言わんばかりの表情、だがさまになりつつあるマキの鳥撮りスタイルに眼を細めていた。

「このSDは何枚撮り、もうすぐ終わってしまうかな」

「目一杯大きくしてあるから五百枚ぐらいかな」

「じゃーもう少し撮れる」

「無くなってもその2のSDに切り替わる」

「そんじゃー後五百枚撮れるな」

「良い画像いっぱい撮れただろう、整理が大変だ、もう終わりにしようよ」

「もう少し」

もう少しもう少しで結局八百枚近く撮ってしまった、整理が大変だと一平はボソボソ。

翌朝、食事していると早乙女から電話が入った。

「昨日は電話すいません、受付とすれ違いになってしまい今朝になって終いました」

「小生との仲だ気にせんでいい」

「で、何用でしたか調査の方は進んでいますか」

「早乙女、いいかよく聞いてくれ、警視庁の相谷監察官に駒を放った」

「監察官とは昨年府中署から本庁監察官になった相谷茂樹か」

「ご明答、だけどそこまで届いてんのかへ」

「無論です、部下の手柄を横取りし昇級の餌に使ったと情報が入っている。記事にするかと編集会議に上がった事もだが、そんな事してまでも出世した奴なんてろくな人間いない、ボロ出すのがおち、そんな時に大々的に記事にすればいい。そんな訳で横取り昇給は没になった」

「そーか平成でもそんな話が在ったのか」

「僕に何か用があつたんでは」

「その監察官の件で、監察官にボロを出させようと駒を打った」

「うつ、横取り監察官とて何処の所轄でも恐れ多い存在、リスクも多い」

「そんな人間のボロを出させようと策を練り駒を放った、頼む小生に手かしてくれ」

「一平先輩にやー敵わんな、何すりやーいいんだ」

「昨年五月、キスゲ橋の転落事故死は事故ではなく殺人だと週刊平成に垂れ込みがあつた、その様に監察官に振れ込んだ。今迄の調査から確信を得た、間違いなく動くはずだ、事実確認に本人若しくは代理人が行く筈だ、その時はどうせガセネタだろう、相手にはしていないと言っても言っといてくれまいか、食い下がってきたらその情報がどんなルートで平成に入ったか知っているんですかと聞き返してくれ、監察官側は戸惑うかもしれん。ただ深追いはタブー軽く流してくれ」

「お易いご用です、吉報を待てて下さい、その時は故石原裕次郎さんも好んでいたレミーマルタン、それが置いてある店に連れて行つて下さい」

「いいとも、では待っているよ」

ルパン三世のテーマが鳴った、マキだ。

「まりさんは元気してる、今宵はのりのライブがある日よ忘れてないでしょうね、朝食終わった」

「朝から矢継ぎ早によー喋るな、今朝はどうしたんだ」

「明後日から幼稚園始んの、明日は三学期の準備やら大掃除があり出勤、今日が冬休み最後、ウグイス撮りに連れてって、何時もの様に弁当は自分が用意するからデザートも、ねー連れてってよ」

「相分かった、一時間後門前で」

「マキちゃんも言ってたように今宵のりちゃんが来るから夜は空けといてね」

と言いまりは朝食の後片付始めた。

小金井新橋に着いた、遠くでウグイスがホケキョと鳴きよる、紅シダザクラは昨日よりだいぶ開いた様だ、河川敷に
おり昨日のポイントにマキが機材のセットを始めた、三脚を伸ばし長玉をねじ込んでカメラを取り付ける。ホーホケキョ
はまだかいなの表情。

「ゆつくり行こうや、まりが作ってくれた特製の冷やしコーヒー飲まんかい、かと言ってもキューバにハチミツ入れただけだ
けど、マキちゃんが喜んでくれると想うよと作ってくれたよ」

「のむのむ、飲むとも」

携帯ポットからコップに注ぐ、これいけるー一気に飲み干した。

「コーヒーは逃げんよ落ち着いて飲んだら」

落ちつけも何もない美味いもんと言いい杯目を注いだ、近くの保育園児だろう保母さんに引きつられて河川敷に現
れた、二十人程いる、小生等に声の届く所に来た。

「おじさん達何やってんの」

「サクラ見物、そしてウグイスが来るのを待っているの」

「ウグイスって何」

「鳥さんだよ、ホーホケキョって鳴くんた、耳を澄ましてみな聞こえるだろう、来たら写真撮るんだ」

ふーん……っあ鳴いた、本当にここに来るの、どうして知ってんのと園児たちはめいめいに。

「鳥さんにも決まった通り道があるよ、サクラが咲くと見えにくいですがすぐ前の開けた所の枝に止まるよ、サクラとウグイスのコラボいいね、写真請け合いだよ」

「コラボってなーに」

「コラボレイションは共同作業とか共演、それをコラボと使っている、サクラとウグイスの共演を撮っているんだよ、もう少しでその木にウグイスが来る」

「ウグイスは動き演技している見たい、だけどサクラさんは演技するの」

最初は良かったが一平は園児達の質問にいつしかタジタジ、察したか保母さんがウグイスさんが来ないといけなから広場の方に行きましよう、園児達に声を掛けお邪魔しました、いい写真いっぱい撮って下さいと言い下の方へ、園児達は其々にバイバイと中にはハイタッチを。

来たぞー、マキが構える、格好は鳥撮り猛者だ。昨日言われたようにシャッターを押しまくった、液晶を見入る顔に笑顔が零れる、ウグイスは又ねとかホケキョと鳴き残し咲き誇るサクラの枝から上手に消えた。その方向から残り少ない春休みを満喫するか私服姿の女高生と思しき数人、ウグイスだと騒ぎこちらの方に歩を進めて来た。

「おじさん達、何撮てんのカックイーカメラじゃん」

「ウグイスだよ、その枝に来るんだ」

「向こうへ行つたよ、もうだめじゃん」

「また来るよ、こうして待っているんだ」

「頑張つてな、うち等は進級に向けての準備期間中です、それもあと数日、春たけなわな河川を散策し心の準備をしています」

「じゃーなーと言い下手方向へ。」

「なーマキ、皆それぞれに話してたんだが、りよ、とか秒、とりまとかが会話に混ざっていた、小生には話の内容が良く

分からん」

「ははーんそれね、それは女子言葉だよ、例えばおくちよは送ってちょうだい、秒は直ぐに、こわたんは怖いを和らげるような言い方でたんを付け、りよは了解とか今時の女子高生に流行ってて、覚えても悪くないよ、女高生の聞き込みなんか役に立つじゃん」

「いやー、よしとくよ覚えきれないくらいあるんだろ」

「おくちよ（送ってちょうだい）、NHK（N 二の腕、H 引っ張って、K キス）等々いくらでもあるよ、アチュラチュは自分と一平との仲を表す時の使う」

「小生にゃーよー分からん、そのアチュチーとかは」

「やだー一平、言語障害なっちゃったの、アチュラチュだよ、ラブラブとアツアツよりも強い表現、分った否定しないよね」
一平は無言・・・、少し下手でシダレザクラの一点を見つめ始めた、シジュウカラが啄んでいる。

「撮ってきたら、シジュウカラとてサクラで戯れるは写真になる」

マキは機材を担いでその方向に。

「メジロもいるよ逆さになり啄んでいる、つあつヒヨドリが横取りだみんな散っちゃった」

「また来る、それまでヒヨドリを撮っていたら」

普段見慣れた野鳥もシダレザクラとのツーショット、絵になるよと一丁前に言いながら撮り始めた。

昼過ぎの吉祥寺、相谷監察官はダークスーツに身を固め三人の男を引き連れてのし歩いている。太陽は高いと言うのに所轄時代か馴染のそれらしき人物がオスツ・・・と声を掛けて来る。相谷監察官は人を探していた、パチプロの田川だ。田川を知らんか遊び人風の男や女に声を掛けている、昨日グランド吉祥寺にいたと聞き込んだ、北口を五日市街道方向に進み一本目を左、二本目を右へ曲がった所にあつた。相谷は誠一を見つけ田川はおらんかと声かけた。

「あれっ、本庁に栄転されたと聞いておつたが今日は何用で」

誠一の質問などどこ吹く風、田川はいないかの一点張り。

「あいつは昨日来たから今日は無理や、今日は立川にいたいと思うよ」

「そうか今日はいないか、出直すのでしょうか」

「お払い箱にした田川をなぜ探しているんだ、あいつが良い情報でも持ってたのかい」

「余計な詮索はしなくていい、聞いたことに答えていればいい」

「でもさー旦那、そのパイプと縦縞のスーツにピッカピカな靴にソフト帽、それに監察官となるとボデーガードを三人も、目立ちすぎや、後ろめたさを感じる人達が早く切り上げたり、入口までは来るんだが旦那たちを見てそそくさと引返してしまう、営業妨害や用事が済んだら早く店から出て行ってくんなはれ」

「お前も一端な口を聞くようになったな、今日は無理だ出直すでしょう」

三人を促し店の外に出た。誠一は相谷達が出て行くのを確認するとすぐさま一平に電話を入れた。

「来たよ来ましたよ相谷達が」

誠一の声は弾んでいる。

「ほほー来たか早かったな」

「今日は田川に会えなかった、また来る雰囲気だった、だけど三人もひっ連れて、あれはどう見たって反社会の人だな、監察官ともなればその様なのを連れ歩くんだな」

「良いとは言わんが事件解決になれば黙認も在ろう」

「あんな奴、のさばらしたつていい事なんぞあらへん、一平さんの力で何とかしてやってくれ」

「田川に言ってくれ、相谷が現れたら前回言ったように落ち着いてリアルに話せと」

「了解、吉祥寺を中心に中央沿線を回っている、明日来ると思う、だけど思うに以前は大学生を情報屋と使っていたが今はどうしてるか、卒業と同時に姿は見えない、越してしまったのか、工学部に籍を置いていた、ラジコンの高手と

聞いている」

「ラジコン、ラジコンにもいろいろあるよな、そいつもお払い箱にしたのかついでに聞いといてくれ」

一平は自室でのりから預かった書類に目を通していた、翔平さんが出金をメモ書きしてあるバインダーを見ていた眼がとまった、細々した金額もあるが二十六年十月、二十七年一月と三月に二十万づつ出金され、アンダーラインが引いてあった、詳細は記されていない、使途不明金なのか、とりあえずそこに付箋を挟んだ。

午後八時十五分、のりのワンマンショーは始まった。

「あなたもあなたも聞いたでしょう、口遊んだでしょう演歌の数々、僅かな時間ではございますが今宵いっぶくでお楽しみください」

歌謡ショーはのりの名調子ではじまった。

「先ずはこの曲からお聞きください、テレビドラマ西部警察の挿入歌（通り雨）から」

♪夜更けて裏町・・・、東京だよおっかさん、スーダラ節やら、どうにもとまらないも入った、昭和三十年代の曲を七曲、今宵も年配刑事さんも多く当時をしのぶか眼を細めたり手拍子打つ人も。リモコンで照明を変えドラムとベースとピアノ演奏にセットし裏へ消えた。

三十秒後、お待たせしましたと現れた、衣装替えした、裾解れたジーンズのチョー短パンに胸にVAN入りのチェックシャツ姿、やおらANAのハッピを羽織った、やんやの喝采浴びる。

「まりさんと一平さんのご厚意に甘えて今宵も歌わせて頂いています、続きましては最近の曲をお送りさせて頂きます、だけどちよつと前かな AKB48はデビュー曲から会いたかった」

のりは手際よく器械を操作する、軽快ドラムとベース音、シンセサイザーに向かいマイクを左手で寄せピアノ音を奏でる、♪会いたかった会いたかった・・・指笛が鳴る。

ピアノと言い歌唱力と言いのりはプロ級だ。一番をそつなく熟す、左手で間奏し右手でワイヤレスマイクを四本とス

タンドマイク一本を用意した。

「本日のスペシャルゲストさん登場です、器械横のドアにご注目」

楽しさ半分恥ずかしさ半分、三鷹署交通課と警務課のお嬢さん方五人がTシャツに色彩違いやがチョーミニで登場、マイクをとりカウンター前でリズムをとり始めた。シンセサイザーに向かうのりが振り向きこつくり、会いたかった二番が始まる、市民の安全と安心を提供する強持てのお巡りさん方も顔が緩み手拍子、会いたかったも三番に、常日頃真摯一点張りな副署長も身体が動いている。歌い終わり五人はマイクを所定の位置に戻し器械横のドアから消えた。

「三鷹署の皆さん有難うございました、これからいまままで通り市民の安全と安心をお願いします、皆さん盛大なる拍手をお願いします。楽しい時間は過ぎるのが早い、ラストナンバーになってしまいました、好きになった人をお送りします」

のりは一番が終わるとシンセサイザーから立ち上がりマイクを持ちカウンター前、狭いながらも右に左に歩を進みながら歌い続ける、間奏では副署長が手を差し伸べ握手、何時もは二番で終わるが今宵も三番まで熱唱、また会いましょう、それは来週この場所で締めくくった。

お疲れさんと一平はのりに声を掛けテーブルに呼んだ。

「のり今の所、翔平さんの事故、いや殺人に繋がる物的証拠はないに等しい、だけど小生は僅かな可能性を見つけては行くのみ、でいっそや言っとつたろう、翔平さんと一緒に仕事していた女性書記官海老原幸子さん、その人とコンタクトをとつてもらえんだろうか」

「お安いご用です、連絡をとつて見ましょう……。明日、退館後ならいいと」

「大使館近辺でも良いが何処に館員の目があるとも限らん、吉祥寺ではどうかな」

聞いてみると言いのりはスマホに語り始めた。

「六時半頃になるかもしれないが吉祥寺でいいです、場所は」

「駅から七、八分の所にこじんまりした割烹（いなか）があるそこでどうだ」

分かりました、明日午後六時半にとのりが言った。

「一平さん、女性秘書官、海老原幸子さんは外務省に勤務していました、ピース王国が三年前大使館を今の地に設置しました、海老原さんは英語は元よりパラオ語等現地語も熟します、その甲斐あつてか引き抜かれました。海洋スポーツを日本に広め観光客誘致に尽力している人です。一平さんと同じアルコールが好きで日本の芋焼酎と同様のタロイモ蒸留酒があります、ロックが一番と言っていた」

じゃー明日ねと言いのりはマキを促し外に、背後から一平が明日がある夜更かしすんなど。

翌日、帳の頃割烹（いなか）で三人は座卓を囲んでビールを飲みドジョウの唐揚げを啄んでいる、ここは板さんとその奥方で営んでいる、手隙を見計らい板さんが上がり端に来て、もー牛じゃーないが聞いて下さいよと言いはじめた。

「以前この界限にいたキザな刑事、その刑事が三人引き連れてひょっこり来たんだ、いきなりおやじ何時もの頼むよときたもんだ、何時ものとは聞き直すと」

「忘れたのか、瓶ビールにおでんださつさと出さんかい」

「ビールはございますが四月半ば過ぎです、おでんは今期は終了しました」

ブツブツ言いながら品書きに眼を通し他つまみを。注文してくれるはいいが他客などどうでもいい、早くしろの一点張り、半時経った頃かな魔王が眼に入った。

「おやじ、あれのロックを頼む」

「魔王はお客様のキープ酒、お出できませんと言ったら俺だって客だ出さんかい」

「凄みを入れて来るんだ、素浪人様と記されていますお出できません」

眼を吊り上げもうこんな店に来るもんか、連れに料金を払わせドアを蹴っ飛ばして出て行った。

「暫く来なかったのだが、今なぜ故に来たのだろうか又来たら一平さん何とかしてよ」

「その刑事つて以前武蔵野署にいたパイプたばこにダブルのスーツ着込んでいた」

「そうです、そのキザ刑事です」

「それは相谷茂樹で今は本庁の監察官です、どんな事を話してたか想い出せる」

「あんの野郎そんなに出世したのか、どうせ実力じゃーないな、悪賢く手柄を横取りしたんだろう。話してたと言えば文屋とか情報源はとか会ってみなければとか言ってたようだ」

無垢の開き戸が開いた、アラフォーと思しき渋いスーツ姿の女性が入って来た、板さんは一平達に会釈しその場を離れ女性をカウンターに案内する。

「お一人ですか何になさいます」

「海老原幸子と申します、松下紀子さんとこちらで待ち合わせしています」

話が終わるやのりが振り向き海老原さんここと声かけた。

「すいません遅れちゃって」

「数分じゃん、気にせんと自分達はあつげらん中です、しかも自分達は適当にやってしまっているごめんなさい、アルコールの強いのは知っているよ先ずは生ね、板さんお願いします、それと魚介類もお願いします、生の後の特製のロックが待っています」

「私に何か聞きたい事があると紀子さんが言っていた、酔ってしまったら上手く答えられるかな」

板さんがお待ちーと、ジョッキと魚介類盛りだくさんの大皿が座卓に載った。

「さあー乾杯しよう、一平さんにマキちゃんでこちらが海老原幸子さん通称さっちゃん」

のりが七分目程のジョッキを高々と差し上げ乾杯の音頭をとった。

「のりから聞いていると思うが小生は元三鷹署の刑事の谷端一平と申します、で、隣は幼稚園の現役の保育士村上

眞姫、小生の定年後はデジカメ様のお供をし野鳥と戯れている、マキはそんな鳥撮りのアシスタントです。幸子さんの事はのりから聞いています、ご主人の翔平さんと仕事を共にしてたとか」

「はい何時も一緒でした」

「アルコールが入ると聞き損じる事も在ろうか今のうちにお伺いしたい、分かる範囲、お答えできる範囲で構いません、のりから翔平は事故死ではなく殺人だと聞き真実追及に一役かつて出ました、警察手帳なしでの捜査は決定打が見づからん」

と前置きし問い始めた。

「お二人は大使館でどのような仕事をしていたか」

「松下さんとは開設当初からのコンビです、主に日本人観光客誘致です。ピース王国はミクロネシアに浮かぶ島嶼の集まりです、ご存知のようにこの地域一帯第一次世界戦争後、ドイツから統治を日本に任せられました。現在では四世が活躍しています、自然豊で魚介類の宝庫、ダイビングを始め海洋レジャーにうってつけの国です、観光客をより多く呼び込もうと四世のタッカー大町さんが島々に呼びかけた、同じく四世のマグロ船船長のラリフ中島さんが手を挙げた。税も株配当のように翌年には利益還元すると称しピース王国建国に二人三脚で呼び掛けた。初年はトントンで還元なしだった、称賛する島が多く加盟し、翌年には人口も二十五万人になり多少還元された。ここで問題が起きた、利益還元派のタッカー大町と儲け主義のラリフ中島とが互い譲らず衝突、国民投票で決めようと事は進んだ。圧倒的多数でタッカー大町が勝利し初代国王に君臨した、この時国王はラリフ中島を議会の重臣に置いた。自然と海洋スポーツ誘致に国王自ら乗り出す、人が人と呼ばず昨年加盟する島も増えた、人口も七十八万に膨れ上がり還元も一入。アジア進出とうって手始めに日本に眼を向けた、昨年一月国王自ら日本に行き、誘致活動をする FAXが届いた、松下さんと私にお鉢が回ってきました。

ホテルの手配はポスターチラシはどうするか、テレビ出演はどうするかは元よりだが国王来日だ、天皇陛下からも声

がかかるだろう、王女も一緒に来、ピース王国のPRに努めると言う、又王女は八丈島に生息するユウゼンチョウウチウオを見たさに潜りたいとも言ってきた」

「国王ご夫妻、王女も来日するとは一大イベントだな日程は」

「今年秋で一週間程度となりそうです、詳細は大使や一等書記官を交え練っているところです、松下さんがいない今、彼の分まで頑張らなければならない、そう想っています」

「体をご自愛すると共に頑張ってください。ところで幸子さん、翔平さんは館内では」

「谷端さん、幸でいいよ私も一平さんで行くから、翔平さんはそれはもう仕事一筋でもあり愛妻家です、毎日のりさんの作った手弁当持参でした、時にはお惚気も、難題にも顔を歪めず進んで熟していた、彼が抜けた今大使館にとっても大きな痛手」

「そんな翔平さんに異変と言うか何かお気づきな事は無かったかと一平は聞いた。

「一昨年十二月ディスクワークしてた時、空間を見つめるかの如く放心状態気味」

一平は幸子に向き直り聞いた。

「それは何であつたか聞いてみたか」

「その時は彼にも仕事に熟せないそんな難題が出て来たのか、言葉を掛けようかと想いました、が、私は静観するしかありませんでした」

「のりはその頃翔平さんとラブラブどうし、何か気づいた事はなかった？」

「翔平は仕事は持ち帰らない主義、いつもと変わらなかった」

で、その後の翔平さんとはさっちゃんに振った。

「昨年二月にも同じ状況がありました、確か経費を算出してた時だと想います、現金出納帳は普段白石補佐官が管理しています、国王来日が決定すると諸経費等で出金も多く松下さんに預ける事も多々でした」

「それだけ信頼寄せたんですね」

「一平さんそれがですね五月連休過ぎ、あの穏やかな松下さんが衝立の裏で書記官補佐と言い争いがありました、私は基より誘致活動メンバーは眼をぱちくりさせしまいました」

「それは何だったのかお分かりでは」

「衝立越しでもあり聞き取れ難い面を在りましたが、一昨年十二月と昨年二月に二千万づつ使途不明金があります、これは何ですかと聞いていた様だ」

「それでその後は」

「何の為に君に出納帳を預けたと想ってたんだ、誘致活動準備をスムーズに行う為である、預けたのは君を信頼しているからだ、余計な事には眼を通さんでも良い。尚も松下さんは食い下がった、出金伝票は無い備考欄にT・Aとアルファベットが記されているだけ、これは何を意味しているんですかと問いたました」

海老原幸子の言に大使館に否ピース王国に何かありと睨んだ、一平の黒目がおおきくなる。

「どうしたのそんなに黒目大きくして」

「あいやー失礼、時折黒目がこーなってしまうんだ」

のりとマキがジョッキーを乾し顔を見合わせ何か掴んだなど。

その後二人はどうなりました、一平が聞いた。

「お前等に出納帳は預けん、必要があれば私のディスク来て必要経費を申請するように、分ったかと声を張り上げ書記官補佐は誘致活動室から出て行った。松下さんは納得いかないのだろう立ち尽くしてしまいました」

仕事熱心な翔平さんの事、無理もないだろうな、翔平さんから使途不明金について何か聞いていない、と一平はジョッキーを置きながら海老原幸子に言った。

「ありません、他に迷惑を及ぼさんかの如く誰一人としてその事を話しませんでした」

「誘致活動計画はどこまで進んでいる」

「はい、日程はまだ詰めなければなりません。今年十月十日から一週間です。当日から旅行社巡りや各局ビデオ撮り、天皇陛下と晩さん会、十五日、十六日は八丈島へ、ご赦免料理を食すと共にユウゼンチョウチョウオとの海中散歩、王女は基より国王も潜られると言う、十六日夕闇迫る頃成田から帰途に、日程的にきつい面もあるが若さ溢れる国王と王女楽しみにしているとFaxが届いています」

「国王ご夫妻、王女に日本の良さもアピールして下さい、今までの話を整理し事故死解決に努めてまいります。生もなくなった所で焼酎のロックと行きましょう」

「焼酎は一平さん好みがあるとのりさんから聞いていますが」

「鹿児島産の魔王です、これをロックで」

「希少価値多分な魔王を飲めるなんて私幸せもんです、先にも言った通りタロイモ酒もロックが最高、どっちがどうか飲み比べてみよう」

あれとつてくれないか、それに氷とグラス四つ一平は板さんに言う、マキは一升瓶を両手で支え手際よくロックを作った。再びカンパイだ、一口二口さっちゃんが嗜んだ、芋独特な癖はないこれいけるー三口。

「さっちゃん心行くまで飲んで下さい」

「そうさせて頂きます、今日は金曜日明日は休み、のりさんの所に泊まる事になっている」
小さめなグラス故、四口で空になった。

いくら自分の所に泊まるからってハイペースにならないようにとのりは言う。

「だって最高に美味い」

一平等と初対面である、どんな質問されるのか緊張してたが何時しかさっちゃんの口も滑らかに、畏んでいたが脚を崩し口調もマキやのり風になってきた。

「私はバツイチのアラフォーです、外務省時代同僚と結婚しました、それが一年持たずに離婚、仕事は出来るんだが私など眼中にはない、仕事オンリー、接待もあり日々帰宅は日付が変わる頃で休日は接待ゴルフ、たまに早く帰宅すると疲れたと言って布団にもぐり高いびき。もうこんな生活いや、私から離婚を切り出しました」

さっちゃん、そんな話一平さんは聞きたくないって、とのりが言った。

「聞きたくなくても聞いて、何でーと仕事オンリー人間は言った。いくら仕事が出来たって女心が分からん人とはおさらばです、今まで尽くしてきたじゃーないか。私は開いた口が塞がらず状態、翌週も何でどうして状態の主人、が強引に判を押させた」

ここで何杯めかをお代わりした。

「一平さんみたいな人だったらそんなことしなくても良かったのに」

「世の中には中性とかもいるが小生は男、ご主人も男、違いはないと思う」

「男だって大違いあるよ、のりさんから聞いている、愛妻家でもある視野が広い、一平さんみたいに時には女心を撥る、奥様と出会った洒落た店によくお連れするとか、マキちゃんも野に山に海にネオン街に連れてつてくれる、のりちゃんのご主人に事情があるにせよライブ会場を提供している。仕事オンリー人間と大違いよ、さつきトイレに立った時二人が言ってたよ」

「おいお前等、小生の留守に言いふらしたな」

「だって本当だもん、良いじゃん」

二人はハモリし言う。さっちゃんも胡坐をかき食べるはー飲むはー、二人も負けず劣らず肴に箸をグラスを傾けた、一平は寝る時間が迫った、と言って週刊平成の偽名刺にガラケーの番号を記した、その後何か気付いた事があつたら電話してくれとさっちゃんに渡した。

「レミーマルタンの店に連れつてつてと、ここに電話してもいいよね」

一平は戸惑った、そんなつもりで教えたのではなかったが、マキとのりは笑いを堪えるのに必死。

「時間が合えばそーしよう、それよりも開けたばかりな魔王、構わんが半分飲んでしまった、飲み干ても構わんが明日は休みとは言え飲み過んなよ、板さん後は頼んだよ」

「任しといて、一平さん今宵も飲み友が増えたようですなー」

三人は又ねと手を振り一平を送った。

翌日昼チヨイ前一平はいつでもキーボードを叩いていた。

・28年10月10日から一週間。14日天皇陛下と晩さん会、15、16日八丈島一泊 離日

・国王 タツカー大町と副国王ラリフ中島 不仲

・26年12月、27年2月と5月27日 白家秀忠(夏目浩二) 相谷 茂樹(荒木田輝夫) 二千万

・27年 7月5日 同じ

・ 5月 白家補佐官と松下口論

・ 出納帳に二千万 T・A

・ 二十七年五月と七月は白家から相谷へA4の書類。

ここまで打ち込んだところでルパン三世が呼びよった、のりからだ。

「おはようさん、幸子さんとすし政にいるの、今ランチ頼んだところ」

「何がおはようさんだ、こんにちはだろそれとも起きたばかりか、そーなんだろう」

「ピンポーン、ここまでは吉祥寺からバスが出てんのそれに乗って来た、二十分で着いた」

「そこには小生の酒は置いてない」

「お酒はいりません、夕んべのが少し体内に残っています、若女将が入れてくれ熱いお茶が最高に美味しい、幸子さんが言いそびれてしまったとかで電話しました、番号教えてもらったから電話してみたらと言ったんだが昨日の今日、レミー

マルタンの催促と想われてはと言い自分が代わりにしました。こんにちは海老原幸子です、昨日は美味しいお酒を有難うございました又楽しいひと時を。私言いそびれてしまったのですが役に立てばと想い電話しました、館内のシュレッターは事務室に設置してあり共同で使用しています、誘致準備室の書類をかけていた時、白家補佐官が来てこれも一緒にシュレッターに掛けと言いついて行った、携帯電話の通話記録でした。上層部には携帯電話が支給されています、補佐官も例外ではなく最新型を持っています、裁断し始めると補佐官だけがラリフ中島との履歴が残っているのが眼につきました、それも月に三度は記されていた。本国へは固定電話が常である、かける際は一等書記官の許可なしでは不可、補佐官はそれを知りながらラルフ中島に携帯電話から通信していた、何を伝えたのか何を聞いたのかは不明、それともう一つ警視庁にもよく電話した記録があった。他館員が入って来たので何も見なかったを装い裁断を続けました。この二つお役に立てばと想いのりさんをお願いしルパン三世鳴らしてもらいました」

「ありがとうございます、小生の黒目が大きくなってしまった」

「一平、進展状況後でいいから自分にも教えて、それから来週のライブに幸子さんも来るって」

「相分った、明日は沖繩便に乗るんだろう大将の握った寿し、たらふく食って乗務に備えてな」

「じゃー来週ね」

一平は電話を切り補佐官、ラルフ中島と頻繁に連絡とり合うと警視庁へもと打ち込んだ。

今迄の捜査状況からT・Aは荒木田輝夫だろう、夏目浩二から二十七年五月と七月に書類（二千万円）が送られた、二十六年十二月と二十七年二月にも白家秀忠（夏目浩二）と相谷茂樹（荒木田輝夫）、書類（二千万）の授受があったに相違ない。宅急便三鷹に確認取ってみよう、長沼所長に電話入れた。一平さん久し振りやな捜査は進んでいるかい、今日はどのような用件でと営業言葉が返って来た。

「次の二件間違はなく授受完了で来たか確認して下さい」

「おやすいご用、だけど事務の榊原さんが昼で外に出ている、一平さんも昼でもゆっくり食してそれからおいで下さい、

調べさせておきます」

「ありがとうございます、そーするよ所長もお昼だろう、では後ほど」

まりがいつもながらと言いながらパスタにトースト、ポタージュスープを陣取った窓際の席に持って来た。

「のりちゃんは私等には明るく振舞ってはいるが内心は淋しさ一杯だと想う、それを払拭出来るのはは真実のみ、一平頑張ってね」

もう過ぐ黄金週間が始まる、今年も大移動がある事だろうとか窓越しに景色を眺めながらパクっている、今年はどうかに連れて行ってやりたいが捜査を優先せねばならんなー、まりの内心はどうなのかとか。一時を回った、まりにござんし早馬に跨った。

長沼所長は営業所の道路際でストレッチをしている、ちよいとクラクション、分ったらしく首の後ろへ腕を回していたがそのまま上にあげ振った。

「ご無沙汰しています、お忙しいところ今日もお世話掛けます」

「一平さん私と中じゃーないか堅苦しい事は抜きにしよう、事務の榊原千賀子嬢もお待ちしとる、サイドカーは事務所脇の白線に沿って停め休憩室に行つて下さい私もすぐに行きます」

受付の引き違い戸を開けお邪魔します、と声しスチールディスクが並ぶ脇を通り奥の休憩室に、榊原事務さんがお待ちしていました、こちらにどうぞと長机のある椅子を勧められた。

「その後、捜査の進展は如何ですかお顔から察すると進んでいるようですね」

「榊原さんにあつちやー敵わんな、お察しの通りです、富士山で言えば五合目駐車場を少し上がった所あたりです。なんせ失敗は許されない、真実へは地道な捜査にあります」

榊原事務さんが大変な事です、ね、捜査って、と言ったところで長沼所長が入って来た。

「お待たせしました、ストレッチは日課なので申し訳ない」

「所長は常日頃どんなに急用だからと言ったって、ストレッチが終わってからの一点張り」

「そんなにも急用があつたのかえと榊原事務さんに所長は言う。」

「つたくもう、所長ったら」

仲を取り持つかのように一平が話し始めた。

「お忙しい中お邪魔しちゃってすまない、お二人に確認して頂きたい小荷物の授受があります」

「で、その小荷物はひよつとしたら例の一件と関わりがあるのでは」

「そのひよつとしたらの一件です。二十六年十二月と二十七年二月、夏目浩二名義の小荷物が白金センターから

三鷹営業所経由で荒木田輝夫宛になかったかなんですが」

榊原事務さんが調べてみましょうとPCのキーボードを叩き始めた。その間一平は雑談を交えて今までの捜査状況を話していた。

「よくもそこまで調べなすったね、頂上も近いんじゃない」

「偽名刺だけでは調査、捜査に限界がある、今はお中道辺りをうろついている状態、こうして情報を集め裏をとりピク目指しています」

「ピース王国のラルフ中島とやらは何か企んでいるのでは」

「それも小生の壊れかけたHDに保存してあるが現段階では確証がない」

十分経ったろうか榊原事務さんがお待たせしました、とA4紙一枚と受領書の綴りを机の上に並べた。

「すいません手こずっちゃった、ジブリ近辺を探したが見当たらない、範囲を広げましたが結局は三鷹市にはなし。武蔵野市に眼を向けキーボード叩いた、そしたらヒットしました、吉祥寺南町六丁目で荒木田輝夫に、二つ目は相谷茂樹へ」

「今までの捜査で受取人は同一人物である、何故に偽名と本名にしたのだろうか」

「一つ目は配送員の記録及び上層部のまとめを見ますと路上で渡したとある、配送中呼び止められ荒木田です私宛に小荷物がありませんかと言われた、はい今向かうところですと急用で出かけなければならん、ここで頂こうと言いつつバックに詰め駅方向に去った。配送員は何ら疑いもせず渡しサインをもらったと記されています」

「それって出来過ぎではないのか、あたかも路上で受け取る為に待っていた、幅はあるが時間指定が出来る。それとなく散策の振りでもしていれば怪しまれん」

「あーあの小荷物か、誤配したんではないかとヒヤヒヤもんだつたな、本人を確認せず渡してしまった、それ以来玄関での受け渡しは別として本人確認できなければ渡しではならん、そう決めました。未だその荷物に関しての問い合わせは来ていない」

「二つ目はどのような状況でしたか」

「相谷茂樹宅玄関で渡したので問題ない」

「いや、その相谷茂樹が問題になっている、そこは本人の家であり我々の捜査では陰でピース王国と繋がっている、サインはどーなっている」

「荒木田、相谷と記されているが似たような書体です」

「同一人物だと先にも言ったが榊原事務さん、それコピーして貰えんな鑑定に出してみる」

「何だか刑事ドラマ見ている様だ、今コピーしてきます」

長沼所長さんと一平は向き直った。

「二つとも白金センターから発送されたのに間違いないよな」

「白金便に間違いない」

白家秀忠（夏目浩二）本人が出したのか変わりが来たのか分からんな、と一平は聞いた。

「大堀センター長はその辺は抜け目ないと想うが聞いてみよう」

所長はすぐさま電話する。

「三鷹だがセンター長いるかい」

親しみおびた話方をした、長沼所長の弟分だ、少し間があったようだが電話に出た様子。三鷹宛てに二十六年十二月と二十七年二月にも夏目浩二に送付してある、本人が出しに來たのか変わりが來たか確かめてくれんか。・・・長沼所長の口元が緩み電話を置いた。

「所長、二千万円と言うと一万円札で並べ方にもよるがA4紙位の大きさになるかな、それと厚さはどーだろう、書類の束に見えるよーになるかな」

「なら事務さんの方が明るいと想う、榊原さんどうか」

「一万円札の大きさは百六十ミリの七十六ミリ、A4紙は二百九十七ミリの二百十ミリ厚さはコンマ一ミリです、一万円札を三枚づつ二列に置けば少し大きいA4紙に近いです。百万づつの束であれば三段と二束、厚紙で包み大き目の茶封筒等に入れ、書類と記すれば誰しもそう想う」

「書類では厚すぎないかな」

「包装紙、茶封筒を考慮しても三センチ位、可笑しくはありません、申告時期には領収書を週刊誌に貼り付ける人が多い、二冊にもなればそれよりずっと大きく厚くなります」

「相分った、ありがとう」

所で一平さんと長沼所長が言う。

「あの書類と記された小荷物に二千万円入っていたと言うのか、私どもは預かった小荷物を指定した場所、受取人に届けるのが業務です。大金をその様な方法で送付する人がいるだろうか、銀行送金がないのだろうか」

「所長、良い質問してくれましたね、銀行送金ならばすぐ足が付いてしまう、現在は小荷物に二千万円入っていたとは確証はない、だけど小生には可能性と推理だ、偽名を使い不明住所、成りすまし住民もそーだ、表に出せない金

の授受を宅急便を使ったと思う。

「事実なら汚れた金に我が社を使うとはとんでもない奴らだ、一平さん真実を頼んだよ」
所長、白金センターから電話が入りましたと事務方が子機を持って来た。

「大堀です見つかったぜ、二十六年十二月と二十七年二月に夏目浩二が偽住所から三鷹の荒木田へ、この二件は三十前と想われる色黒の女性が持ち込んでいる、一平さんはそこにいるんだろ出してくんないか、私もだがなっちゃんが生聞きたいだつて」

「一平です、ご無沙汰しています、又先日はセンターぐるみでの協力ありがとうございました。一つ目の堀が埋まりつつあります」

「いやーとんでもございません、協力は惜しみません、なっちゃんが急かし始めた変わるよ」

「こんなにちわ元気しています私、コーヒーの腕上がりました嗜みに来て、腕上がったよまりさんに負けないと思うよ
レミーマルタンも良いけど私のコーヒー飲みに来て」

「相分った」

「何時もの相分っただね、返事だけで終わらないように調べ事は何でもするから、あつ隣でセンター長が渋い顔し始めた変わるね」

「一平さん申し訳ない、ここのセンターではコーヒーの良さが分かる者が少ない故の事です。なっちゃんと私はPCと首っ引きで探した、出て来たんだ他にも三鷹への小荷物便が、昨年五月と七月はお分かりの通りだがこの二回は夏目本人と想われる男性が出しに来た、一平さん驚かんで下さい、送り人の住所は白金ではあるが番地が不明、そこから昨年十一月、十二月、と今年一月と三月に府中市紅葉丘の共同住宅に送っている、しかも驚くなかれ受取人は荒木田輝夫だ、窓口に来たのは色黒の女性ではなくアラフォーのキャリアアウーマン風だった、どーだ一平さん参ったか」
「まいりました」

「住所をおコピーしとく、たまにはコーヒー飲みに来てやってくれ、隣で手招きしコーヒー飲む仕草頻り、頼んだよ」

「今捜査は六合目、頂上に辿り着いたら真つ先に飲みに行くと伝えて下さい」

待ってるよと軽やかな声でなっちゃんが言い電話を切った。

「府中市紅葉丘は府中営業所だな、その所長とは行き来がないが電話入れてみるか」

「所長、その住所に行ってみます、それからでも、どーせ成りすまし住民だろう」

難なく部屋は見つかった、築間もないのだろう真新しい、ワンルームの様だ。部屋の窓には花柄なカーテンがかかっている。二階の三号室へ行った表札はなくドアに203の文字が、ピポーンしたが応答なし、今度はノックしてみたが同じ、買物帰りだろうレジ袋から長ネギが見える、六十絡みな女性が怪訝な顔をし通り過ぎる、怪しまれてはと小生は後ろから呼び止めた。

「この部屋はお留守の様ですね、何度もピポーンしても返事ありません」

「仕事で出かけているんでしょうまた来てみて下さい。ご苦労様です、ここは昨年四月に新築されたワンルームマンションです。年金生活者の私にはうってつけと想い即入居しました、直ぐ満室になりましたが手狭なのか直ぐ転居も、今は独身者で埋まっているようです、あの部屋は昨年十月頃入居された、だけど生活してはいないんじゃないのかカーテンは何時も締っぱなし、洗濯物は見た事ないし見た限り夜も明かりが点いたためしがない、時折ドアの開閉音がするから入居者は居ると想うんだが、それも二か月に一遍程度、お宅さんも運がよけりゃーその時に会えるかもよ、メモでも置いていったら」

「有難うございますそーします」

一平はマンション脇に停めといった早馬口に跨った、走る前に府中署ガキさんに電話入れる、電子音性がしゃべり出した。職務中失礼しました、お手隙になりましたら電話下さいと言い切った。

帳の頃一平はいつぶくのトンボに腰かけていた、窓際の指定席は先客ありだ。

「今日もお疲れ様でした、その表情だと収穫大の様ですね」

「まりがそー言ってくれるから警察手帳なしでも調査いや捜査に前向きでいられるんや」

七時ちよい前ガキさんから電話が入った。

「一平さん今終わった所だ、いっぶくにいんのかえ、いるんだったらそこで落合い要件とやらをお聞きいたそう、今向かっているところだ、まりさんのコーヒーも飲みたくなつた十分位で着けるが」

「はい、待っています」

いやー、まりさんコーヒー頼むよと無垢開き戸を開けながら入って来た、一平は小生よりもまりかと言った表情、それだけまりのコーヒーは美味んだな、視野を広げガキさんを隣のトンボに。

「で一平さん、今宵は俺に何か調査依頼ではないか何なりと言ってく下さい」

「ありがとう、コーヒー前に申し訳ない早速だが、府中市紅葉丘のワンルームマンションの住民を調べてほしんだ、ローソン港白金店で例の夏目浩二から荒木田輝夫へ書類と称し小荷物が配送されている、しかも三月までで四回あった。今迄の調査からその書類には二千万円が入っていたんではないか、警視庁監察官相谷茂樹が絡んでいること間違え無し。お願いできるかな」

「一平さん水臭せーじゃーねーか、断る筈がない。待ててくんない吉報をな」

「二人ともそんなに難しい顔してないでコーヒーでも飲んで」

とまりが持って来た。

ありがとう、このコーヒー最高やとガキさんはまりとハイタッチ、隣で一平が苦笑いするのを見ながら言う。

「まりさん、今宵は府中署交通課バリバリの婦警さんを連れて来る否もう来ている、あそこの丸テーブルの二人だ」

稲垣巡査長は手を挙げた。

「あの二人は暇を見つけてはコーヒーを飲み歩いている、こないだコーヒーで名高い店がある、名はいっぶくだと言ったら

行つてみよう二人は即決、今日行きますガキさんもいかがと、遅れるが行くと答えた。二人はミルクも砂糖もなし、あるのはコップに入つた水だけ、まりさんそんなのありかへ」

「それ、通の飲み方です、開店当初はコーヒーに水だけで出していました、ミルクに砂糖をお願いします、その様なお客様が多くなってきました、いつしか水は出さずミルクと砂糖を置くようになりました、だれどご希望のお客様にはお出ししています、あちら丸テーブルのお二人もご希望で水を」

「一平さん、そんな飲み方知つてた」

「小生が分かる訳がねーじゃーねーか、コーヒーに水が付いてくるなんて」

「俺だけかと想つたよ、でもあの二人何処でそんな飲み方知つたんだろう」

「プライベートと職務は別、二人にカップを翳したら、二人も乾杯如く返してくるよ」

まりの言つた通り二人は翳してきた。

「ガキさんもう一つお願いがある、これは宅急便の受領書のコピーだ、荒木田輝夫と相谷茂樹でサインしてある、筆跡が似ている、同一人物の可能性が、鑑定をお願いしたい」

「似ているように見えるな鑑識に直ぐ回そう」

「ジブリ近隣のワンルームマンションで夏目と荒木田で小荷物の授受があつた、それ以前にも吉祥寺でもあつたようだ。しかも相谷監察官が自宅で受け取つたサインと路上での荒木田のサインが酷似してる、本人であればジブリ以前に吉祥寺でも受け渡しがあつたと考えられる」

「明日あさつては非番だ、紅葉丘のマンション、配送所、周旋屋等を当たつてみる事にします、サインは仲のいい例の鑑識に回しておく、婦警さん等に軽く敬礼し一平さん吉報を待つて下さい」

まりにハイタッチし稲垣巡査長はそそくさと外へ消えた。

一週間後、世間ではゴールデンウィークとやらだが小生には関係ない、まりの奴翔平さんの真相早く暴いて今月は

一周忌だよと言いつける、大勢の方が捜査協力してくれている休んではいけない。一平は独り言のようにブツブツ言いながらキーボード叩いていた。ルパン三世が呼びよる。一平さん俺だ稲垣だ、ガラケイが壊れるんではないかと想えるほどに大きな声だ。

「調べたぜ電話じゃー何だーどこかで落ち合おう、どつかない」

「三鷹に居酒屋だがこじんまりとし静かな店がある午後七時にどーだろう」

「了解、七時にそこで」

マキがトンボに腰かけ手持ち無沙汰にコーヒークップを右に左に回している、自分も行くと迫った、遊びじゃーねーんだと一平が言うも食い下がって来た。

「今まで自分はどれほどに協力してたと思ってるの、今更ダメとは如何なものですか」

一平はマキの迫力に相分ったと言うのみ、自分その店知ってる七時ねと言い意気揚々といつづを後にした。

十分ほど遅れてしまった、マキがトンボで遅いと言った表情を浮かジョッキを、すまんと一平、稲垣巡査長はテーブル席で紫煙をあげていた、マキに手招きしテーブル席に。

ガキさん遅れて申し訳ないと言いつながら向かい席に座った、マキを見ながらガキさんは怪訝な顔つき。

「二人はいつぶくでニアミスしたと想うが初対面同然だな紹介しよう、こちらは府中署交通課の稲垣巡査長、小生の脇は鳥撮りのパートナーでもあり今回の捜査協力者、村上真希です」

「三鷹にお住いの村上と言えば柔術道北野流道主村上一太郎さんと関係は」

マキは一平の顔を見もじもじしている、一平は助け舟を出した。

「道主一太郎さんは祖父、父は三鷹署刑事課課長の裕太郎さんです」

「署でも時折話題になっている、109や竹下通りで見かける今風なお嬢さんと、だけど北野流の使い手であり武術に関しては男勝りだと噂頻り、おてやらかに」

「ガキさん心配ないよ、悪は許せんしめっぽう強いが普段は今言ってた通り今風なお嬢さんです、小生等もジョッキー頼もう、それにつまみも」

カウンター内に声を掛けた。

「酔いが回らん内に捜査結果をしておこう、前後するが3枚にまとめといた。

・受領書のサイン、荒木田と相谷は筆跡鑑定の結果同一人物

・紅葉丘203号室を借りに来たのは田川健二郎であり相谷監察官の情報屋、現在は彼ともう一人子分がいる

・ドアに203号室と記してあるだけで表札はなし、窓にカーテンは掛かっているが人の気配は感じられない、郵便受けにチラシが溜り大家さんがかたづけ事もしばし

・住民の話によると数回浅黒い女性が入りしていた、その時小荷物を受け取り

・宅急便に小荷物届時の事を聞いたみた、浅黒い女性が菊川修ですと受け取りサインした

・白金の不明住所から竹内一成の名で紅葉丘に書類が

・昨年十一月二十一日、十二月五日、今年一月二十七日、四月十一日と四回

・送付元を調べたんだがローソン扱いでパートさんにも変わっているし受付時の状況は不明

・送り状の竹石智也名の筆跡は白家秀忠（夏目浩二）と同一

「一平さん以上だが質問は」

「ありがとうございます、よくぞここまで調べてくれました礼を言います」

ジョッキーが運ばれてきた、乾杯しよう、マキが空になっちゃったーお代わりと。

「おい一杯目だろ、飲み過ぎだ控えろよ」

「一平のせいにするつもりはないけれど遅れたからこうなっちゃたんだ、空っぽで乾杯じゃー」

「相分かった」

マキの分が出てきたところで三人は早期解決にカンパイ、マキさん強いんですねとガキさんが。

「爺っ様は以前、一升瓶を上に向け逆さにし一気飲みしたとか、その昔は一升酒飲みなけりやー村上水軍じゃーねーと度々言ってた、父っ様は兎も角自分はそんな血を引いたのかも」

そこでガラケイが震えた、週刊平成の早乙女浩二だ、

「一平さん動きがあったよ、相谷監察官が人相の悪いのを三人引き連れてさっき編集室に来た、要はキスゲ橋は殺人ですと情報を入れたのは誰だと聞いて来た、A4にそう書いてあるだけでこの誰だか分からないと言うと、調べはここまで進んでいるかと聞いて来た。今は何も分っていないあれは事故死ではなかったのですか、解決済みな事故に監察官直々のお出ましとは何か不審な点でもあるのかと逆に聞いた、そしたら別にどうって事はないがとしどろもどろ、結局は何か掴んだらすぐさまわしに連絡せよだった、一平さんが睨んだ通り監察官は訳在りだね」

「ありがとう、これでキスゲ橋の一件と監察官は繋がったようだな、又来るとも限らん以後も今日の様に相対ししてくれ」

と言ひ黒目を大きくしながら電話を切った。ガキさんとマキに良い情報が入ったと伝える。

「ガキさんの調べでは紅葉丘に送付した折、使った竹石智也名は筆跡鑑定で白石補佐官で相違なし、紅葉丘203号室の名義人は田川健二郎だが菊川修名で受け取った住人は相谷監察官、若しくは浅黒い女性だ、受け取りの時間だけその部屋に居たんだ、小生の推理をガキさんどう想う」

「決めつけるには早いかもしれんが推理通りも成り立つ」

「白金のローソンで受付し送付したは分かっているが誰かは特定できない、二十六年十二月と二十七年二月に送付のおりキャリアウーマン風なアラフォーと浅黒い三十前後の女性が出している、紅葉丘に送付した女性は其々同一人物ではなからうか」

「それと無理やり関連づけてもどうか」

「白金センターに、日にちは経って居るがどんな女性だったかその時の状況を聞いてはどうだろう」

とマキが言う。

「どーもアラフォーと浅黒い女性が気になる、明日行ってみよう、が連休中だ大堀センター長やなっちゃんはいるかな」

「女性が出てくるといつもこうだ、一平だけに任せられない自分も行きます明日何時にする」

「マキちゃん一生懸命だな俺も見習わないといかん」

とガキさん。

「保育士である事を忘れ捜査に熱中するはマキの良い所でもあるし悪い所でもある」

と一平が言い終わらんうちに一平の為だよと口を尖んがらす、ガキさんは苦笑い。

「小荷物授受が吉祥寺に始まり三鷹ジブリ近隣、府中市紅葉丘へと変わって行った、しかも何故に偽住所偽名で、それに小荷物が書類なれど二千万円が包んであった、裏金送金故の事と小生は読んだがガキさんマキどー思う」

「一平さんもそうだとしたらその裏金は何の為だ、キスゲ橋の事故死に繋がるとでも」

「そー想っている、キスゲ橋の事故死に相谷監察官が関わっている、ピース王国大使館も、翔平さんの死は刑事魂と
言うか長年の勘だ、他に何かどかい企てがあるよーで仕方ない」

稲垣巡査長とマキは顔を見合わせた、三人の沈黙は続いた。そんな時厨房からメモが届く（小振りなどマグロのカマ
が焼けました、他のお客様の眼もありますので予約のカマですとお出しします、ご了解を）一平は厨房に向かってVサイ
ンを送った。